

この句には次の故事の投影がある。『文選』「運命論一首、李蕭遠」の一文を載せる。

「故木秀於林、風必摧之、堆出於岸、流必湍之、行高於人、衆必非之。」（傍線筆者）。

〔口語訳〕 つまり、木が林の中で他より抜き出ると、風が必ず吹き倒す。堆積した土砂が岸から突き出ると、水の流れは必ず押し流すようなもの。人間のやることも、他人より行いが高潔であると人々は必ず悪く言う。）

補説⑤

○182 句目「燈滅異膏煎」についての考察

この句中の「膏煎」は次の一文を踏まえる。

『莊子』内篇人間世第四「山木自寇也、膏火自煎也。」（傍線筆者）。

〔口語訳〕 山の木は伐られる運命にあるし、膏は燃やされる運命にある。（人間に当てはめてみれば、才能があるもの「有用なもの」はかえって人にそしられ災いをこうむるの意）。

また「燈滅」の用例として以下のような句を挙げることができる。

▼白居易「夜雨」 「殘燈滅又明」

▼『菅家文章』「60 殘燈、風韻」「餘光不力扶持舉、競下蘆簾恐見風」

▼『菅家後集』「508 燈滅二絶」「脂膏先盡不因風、殊恨光無一夜通」

以上のような用例からうかがえることは「燈火の消え方」を、道真は二通り想定していることである。油が尽きて消えるのと、「風」によって消される消え方である。ここでの「風」を人間に置き換えれば、道真を陥れ